を当用漢字に復活し，游走子は辶のある遊に置きかえて遊走子とし，葯は支那では藥の略字によく使つているが日本では花粉嚢を主とする雄性器官以外に使い途がないから漢字は捨てゝヤクという假名にするといつた程度に整理されて行けばよいのではないかと思うのである。

幸い，昨年末には國語審議会が改組されて，自然科学分野の人達も委員に加わり，全体が打ちとけてもつと広い視野から当用漢字についても考えるという氣運がでて來ているときくのは喜ばしいことである。そこで分類學の方でも当用漢字の精神はよいが，その運營と適用範圍には若干の修正が行われてしかるべきであるという見地から，いくつかの意見がでてもよい，いや出るべきではないかと思う。それについて少し述べてみたい。

比較的使用される漢字であつて当用漢字にないものを拾つてみると次のようなものがある。(　)内がそれである。稍々稀に使用するものは除いた。前述の葇荑や桴の如きでこれらはもちろん当用漢字に入つていない。

(灌)木，(喬)木，(胚)，胞子(嚢)，(禾)本，(穎)，(腋)生，円(錐)形，(披)針形，(篩)管，(藻)類　蜜(腺)，(蕚)，(葯)，(鱗)片，(稈)，(腊)葉，(擔)子，(繖)形花序，狹(窄)，(挺)莖，群(叢)，(硅)藻，(頸)細胞，(托)葉，(嫌)氣性，二(叉)分枝，(剛)毛，(楕)円形，呼吸(腔)，(糊)粉粒，葉(鞘)，(蒴)，葉(隙)，(翅)果，收(斂)，(彎)曲，(鞭)毛，(痩)果，(苞)，(蛋)白質，虫(癭)，(蔓)植物，(塡)充，(澱)粉，(籐)本，排(泄)，腹(溝)細胞，(痕)跡，有(稜)，(癒)着，(濶)葉樹，(濾)過，(藍)(藻)などが目につく。

これらの中には前に言つた方式で置きかえるよりも全く別の言葉を新しく作つた方がよいものもあろう。たとえば濾過といわずにこすといい，腊葉といわずに押葉でよいなどである。又他の分野での決定がより重要なもの，たとえば楕円などは数学の方で決めたのに従うべきであろう。しかし生物学の方で当用漢字に加えるか又はその例外として生物学関係の教科書では使うというようするか，いずれにしても今のまゝで使つた方が廢するよりもはるかに便利であり，又將來も便宜の度が高いと思われるのは胚，托，嚢，鞭，藻，腺，苞，隙，斂などであると思われる。

用語の整理は簡單のようで実は大変な仕事である。やつた結果が誰もが使わぬようなものでは仕方がない。多少の不備はあつてもやはり直した方がよかつたというものでなければならない。本誌の讀者諸賢の御援助を願う次第である。(昭和25年2月15日)。

○ ヤシャブシとオオバヤシャブシ（猪熊泰三，倉田　悟）T. INOKUMA and S. KURATA: *Alnus firma* Sieb. et Zucc. and *Alnus Sieboldiana* Matsum.

Alnus firma Sieb. et Zucc. なる学名は從來，オオバヤシャブシに用ひる学者と，所

謂ヤシャブシに当てる学者とがある。松村任三先生は *Alnus firma* Sieb. et Zucc. を，オオバヤシャブシ *Alnus Sieboldiana* Matsum. とヤシャブシ *Alnus Yasha* Matsum. との混合物とし，廢棄された。*Alnus firma* Sieb. et Zucc. の原記載を見るに，莖•葉共に毛が少く，この点オオバヤシャブシを思はせるが，雄花序が頂生し，雌花序が 1~3 個集まると記された点は，所謂ヤシャブシに一致する。しかるに本邦產のヤシャブシの中，九州產に莖•葉の毛が少く，花序の性質も *Alnus firma* Sieb. et Zucc. の原記載に良く一致するものがある。そこでこれこそ *Alnus firma* Sieb. et Zucc. であり，多少中間型も見られるが，莖•葉が多毛で，著しき時は葉裏がビロード狀を呈する迄の變化のある東日本產は，ミヤマヤシャブシ(本多)として区別すべき一変種であると考へる。ミヤマヤシャブシの学名は *Alnus firma* Sieb. et Zucc. var. *hirtella* Franch. et Sav. で良い。オオバヤシャブシは立派な獨立種で，ヤシャブシとの区別点は既は松村先生・柳田由藏氏〔林学会雜誌 9 卷 2 号 pp. 10~13〕，籾山泰一氏〔植物研究雜誌 9 卷 pp. 52~54〕等により明らかにされて居るが，尙ヤシャブシでは，雌花序•雄花序を共用せる枝にては概ね，雄花序は頂生し，それ故頂生の葉芽を缺き，從つて枝の頂端が止まり，花後毬果を 1~3 個着けた最上部の短枝の基部にその殘影をとどめ，本年枝はそれより下部の節より伸長して居る姿が腊葉にも良く現はれて居るのに対し，オオバヤシャシブシでは，雌花序・雄花序を共用する枝に於ては兩花序共側生し，從つてその枝の頂芽が伸長して本年枝となるので，前年枝の側芽より生じた毬果概ね 1 個，稀に 2 個が，長枝に側生せる感じが良く出て居る。

Alnus firma Sieb. et Zucc., Fl. Jap. Fam. Nat. **2** (1846) 229; Franch. et Sav. Enum. Pl. Jap. **1** (1875) 457 (p. p.); C. K. Schneider in Sargent, Pl. Wilson. **2** (1916) 506 (p.p.).

Alnus firma Sieb. et Zucc. var. *typica* Regel in DC. Prodr. **16**, pt. 2 (1868) 183 (p.p.).

Alnus Yasha Matsum. in Journ. coll. sc. imp. univers. Tokyo **16**, art. 5 (1902) 4, t. 2. (p.p.).

Alnus firma Sieb. et Zucc. var. *Yasha* Winkl., Betulaceae (1904) 104 (p.p.).

Nom. Jap. Yashabushi.

Hab. Prov. Ohsumi: Isl. Yakushima (T. Inokuma); Prov. Hyuga: Mt. Kirishima (T. Inokuma); Prov. Bungo: Mt. Yuhu (S. Ikeno) (T. Tomita).

var. **hirtella** Fr. et Sav. l. c. **1** (1875) 457 (nom. nud.) et **2** (1879) 502.

Alnus firma Sieb. et Zucc. sensu Fr. et Sav. l.c. **1** (1875) 457 (p.p.); C. K. Schneider in l.c. (1916) 506 (p.p.).

Alnus firma Sieb. et Zucc. var. *typica* Regel in l.c. (1868) 183 (p.p.).

Alnus Yasha Matsum. in l.c. (1902) 4 (p.p.).
Alnus firma Sieb. et Zucc. var. *Yasha* Winkl., l.c. (1904) 104 (p.p.)
Alnus firma Sieb. et Zucc. subsp. *hirtella* C.K. Schneider in l.c. (1916) 506.
Nom. Jap. Miyama-yashabushi. Distr. Honshu.

Alnus Sieboldiana Matsum. in l.c. (1902) 3, t. 1.
Alnus firma Sieb. et Zucc. var. *typica* Regel in l.c. (1868) 183 (p.p.).
Alnus firma Sieb. et Zucc. sensu Franch. et Sav. l.c. **1** (1875) 457 (p.p.); C.K. Schneider in l.c. (1916) 506 (p.p.).
Alnus firma Sieb. et Zucc. var. *Sieboldiana* Winkl., l.c. (1904) 104.
Nom. Jap. Ohba-yashabushi. Distr. Honshu.

This species is a good one and distinguishable from *Alnus firma* as follows.

Alnus Sieboldiana Matsum.: Branchlets and leaves glabrate; strobiles solitary (rarely 2); when a branchlet has both pistillate and staminate catkins, the latter is lateral and situated below or between the former, and leafy branchlet from the terminal bud.

Alnus firma Sieb. et Zucc.: Branchlets and leaves glabrescent or pubescent (var. *hirtella* Franch. et Sav.); strobiles 1—3, racemose; when a branchlet has both pistillate and staminate catkins, the latter is generally terminal and lateral above the former and as the strobiles grow after blossom the part of the branchlet above the insertion of the raceme of strobiles withers and remains at the base of the raceme, and leafy branchlets from lateral buds below.

○ 佐藤邦雄氏の「佐久の植物方言」（木村陽二郎）　Y. KIMURA: Local botanic names in the Saku district, Naganoken by Kunio Sato.

佐藤邦雄氏は軽井沢中学に教鞭をとつておられる謙譲な方で古くから山野に植物に親しまれた。この度，長い年月あつめておられた佐久地方植物方言がまとまつて一册の書物として出版されたことは眞に喜ばしい。アイウエオ順の方言でこの植物名と方言の意味とか効用とかがわかる。次に「和名で呼ばれている植物」「和名と同じ方言で呼ばれる植物」「方言から和名索引」「和名から方言索引」の項目で方言と和名の関係を述べ盡している。それでカミソメバナはクサフジをさすこともありツユクサをいうこともあるし，ギボウシをウリッパ，ゲイロッパ，コウレッパ，コウレンバ，ヤマカンピヨウなどということがわかる。ただこゝに佐久地方の小分けの場所で方言が違うならばそれを記していただきたかつたと思う。私は軽井沢でウリッパの方言をきき、葉柄をとつて葉身が道ばたに